

---

# リリカルなのは00 StrikerS

過ちは繰り返させない!

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのは00Strikers

### 【Nコード】

N6645Y

### 【作者名】

過ちは繰り返させない！

### 【あらすじ】

爆発で起こった次元断層に刹那とフェルトは吸い込まれる。果たして刹那とフェルトの運命は！？ガンダム00となのはStrikersのクロスです。

## プロローグ

刹那とリボンズ、二人のイノベーターの戦いが終わろうとしていた刹那の愛機のリペア機『ガンダムエクシアリペア?』は一時的にブーストモードを可能としている

それに武装はGNソード改、GNビームサーベルがある

そして0ガンダムは、特に変わった武装はなかった

2機は、構えた

0ガンダムは、盾を捨てて、背中からGN粒子を最大に放出し、両手でビームサーベルを構える

エクシアは右手の実体剣を0ガンダムに向けて、背中からGN粒子が何重にもなって吹き荒れる

そして2機は、最大のスピードで走った

そしてエクシアのコックピット付近にビームサーベルが突き刺さり、0ガンダムにはGNドライブごと貫いた実体剣が刺さっていた

2機は沈黙したあと、爆発を起こしたが、それがきっかけで、次元に穴があいてしまった

刹那は、気絶した状態で、エクシアと共に穴に吸い込まれていった

フェルトたちはヴェーダから貰った情報で刹那の位置を特定したが、

「エクシアの反応、ありません」

そのポイントにエクシアはいなかった  
フェルトの目元には涙が浮かんでいた

「まだあきらめないで！フェルト、小型艇でエクシアの搜索を！」

「了解…！」

そしてフェルトはブリッジを出ていった

小型艇に乗り込み、フェルトはヴェーダがくれた情報にあったポイントに向かっていた

フェルトの中には期待と不安が入り混じっていた

（刹那、無事だよね？）

そんなことを思いながらフェルトはポイントに向かう  
そしてそのポイントに着くと、おかしなものを見つける  
それは、断層のようなものだった

「何あれ？」

フェルトは小型艇を近くまで向かわせる  
すると、

「えっ!？」

小型艇が操縦不能になり、断層に向かっていく  
そしてフェルトは断層に吸い込まれていった

## episode 1

「うっ、ここは？」

刹那は目を覚ますと、そこは地上のどこかの森の中だった  
辺りを見渡すもエクシアもない  
それに服もソレスタルビーイングの制服になっていた

「一体何が起きたんだ？」

刹那は立ち上がろうとした瞬間、手に違和感があった  
それは、刹那の手を誰かが握っていたのだ  
刹那はその者の名を口にした

「フェルト……」

刹那の右横でフェルトが眠っていたのだ  
フェルトもソレスタルビーイングの制服を着ていた  
そしてフェルトが目を覚ます

「あれ？…刹那？」

そしてフェルトの目元に涙が浮かび上がる

「刹那！」

フェルトが刹那に抱きついてきた

刹那は一瞬戸惑った

だが、すぐに落ち着いてフェルトの頭を撫でる

「心配をかけたな……」

「ううん。刹那が無事でよかった」

フェルトは笑顔を見せる

刹那は口元を一瞬緩め、すぐにいつもの表情になる

「しかし、ここは一体？」

「私はエクシアを探していたときに、空間に穴があいていたからそれを調べようと思ったたら、その穴に吸い込まれて……」

「…そうか……」

刹那は表情を暗くする

「でも刹那が無事でよかった」

フェルトは純粹に嬉しそうだった

「マスター」

刹那とフェルトは驚いた表情を浮かべた

そして刹那は声がしたポケットの中に手を入れる  
ポケットの中には青い宝石が入っていた

「お前は？」

「私です。エクシアです」

「っ！エクシア!？」

刹那とフェルトはなぜエクシアがこの姿になってしまっているのか不思議に思ったが、今は現状を確認する方が先だと思った

「エクシア、俺たちはどうなったんだ？」

「マスターたちは、私と0ガンダムの爆発で起きてしまった次元断層に飲み込まれ、こちらに来てしまったようです」

「次元断層ってあの空間に穴が空いてた…」

「フェルトの言うとおりです。あの時マスターは気絶していたので気づきませんでした。フェルトはそれを見ていたのです。そしてここ、この世界はマスターたちがいた世界ではありません」

「…どっいつことだ？」

「次元断層で異世界に来てしまったようです。私も気がついたらこの姿に…」

「そうか」

「そしてこの世界はミッドチルダという魔法の世界です」

「魔法？」

「二人が知っているような絵本に載っているような魔法ではなく、体の中にあるリンカーコアというものがあることと、デバイスとい



う機械を駆使して魔法を使つようです。お二人のなかにもリンカー  
コアはあります」

「私にも？」

「はい。フェルトはそれほどではありませんが、マスターの魔力値  
はSS+です」

「！」

刹那とフェルトは驚いたが、それはエクシアの言葉によりすぐに水  
に流される

「マスター！こちらに接近してくる正体不明の機体を30機確認！」

「えっ！？」

フェルトは少し怖がっていた  
仕方がない

フェルトは普段、トレミーでオペレーターをする  
直接戦闘には出ないのだ

「心配するなフェルト」

フェルトは刹那を見る

「フェルトは俺が守ってやる！」

「っー！」

刹那と言う

仲間を死なせはしない！

そして突如二人にエクシアが言っていた機影が到着しようであり、二人に攻撃をしてきた

「ちっ！」

「えっ！？キヤッ！」

刹那はフェルトを抱きかかえて走る

フェルトは少し顔を赤くする

刹那はフェルトをお姫様抱っこしている女性だったら赤面してもおかしくはない

「マスター戦いましょう！私の名前を言ったあとセットアップと言ってください！」

「了解！エクシア、セットアップ！」

そして刹那の体が光り始めた

フェルトは眩しくて目を閉じる

そしてフェルトは体に違和感があることに気がつく  
体にゴツゴツしたものがくっついていた

目を開けると、そこにはエクシアとなった刹那がいた  
刹那はフェルトを下ろすと、敵に体を向ける

「隠れているフェルト」

「う、うん」

刹那は右手の実体剣を展開した

「エクシア、刹那Fセイエイ、目標を駆逐する！」

刹那は背中からGN粒子を吹かせて敵に突撃していった  
フェルトは刹那を心配そうに見ていた

私はガジェットが出現したポイントに親友のフェイトちゃんと一緒に向かっていた

「最近、ガジェットの出現率高くない？」

「そうだね…あと、ここに来る途中でガジェットともう一つ魔力反応がなかった？」

「なのほも？」

どうやらフェイトちゃんも感じたみたい

そして現場付近まで近づくと、そこでは、

「なのは！あれ…」

緑の粒子が空に向かって溢れていた

最初は驚いたけど、すぐに別の感想が出てきた

「綺麗…」

「うん、そうだね…」

そしてその粒子は消えた

私たちはガジェットを目視できる距離まで近づいた

だが、ガジェットの中に先程の粒子を放出しながら、ガジェットを切り裂いていく

下にはガジェットの残骸が転がっていた

「すごい！あのロボットが一体で？」

「とにかく行くこうなのは！」

「うん！」

刹那は30機いた機体をひと桁まで減らしていた

「遅い！」

1機を後ろから横なぎに切り裂いて、近くにいるもう1機に向かって、要背部のビームダガーを投げる  
ビームダガーは1機に突き刺さり爆散する  
すかさず刹那はビームライフルを放つが、敵に当たる前にビームが弾かれた

「なに！？」

「マスター、あれはAMFと呼ばれるものです」

「AMF？」

「マスターが使用するライフルはビームではなく魔法です。あれは魔法を防ぐバリアのようなものです」

「…そうか」

刹那はここまで接近戦で戦っていた  
今ここでこの出力でのライフルは無意味だということが分かった

「なら接近戦でいく！」

刹那は実体剣を展開して、敵に切りかかる  
そしてラスト1機になる  
刹那は最後の1機に突撃する

「これが、俺たちの、ガンダムだ!!」

最後の1機をまっぴたつにして、刹那は実体剣を折りたたむ  
そして地上に降りて刹那はバリアジャケットを解除して、フェルト  
のもとへ向かう

「刹那、ケガはない?」

「ああ。問題ない」

「そう…よかった」

フェルトが安堵した表情を見せる

「マスター、先ほどとは比べ物にならない魔力を感じました」

「なに?どこだ?」

「こちらに近づいています。これは…人です」

人か…なら情報も手に入れられるかもしれない  
刹那はそう思った

「刹那、あれ…」

フェルトが上に指を向けると、そこには茶髪の髪で白い服に身を包

んだ女性と金髪の髪をして黒い服に身を包んだ女性が降りてきた

「時空管理局です」

「時空管理局？」

刹那とフェルトが首をかしげていると頭に声が響いた

マスター、フェルト

（！なんだ、エクシアか？）

（頭に声が響く）

これは念話というもので魔法の一種です。心で相手に話しかけるようにすればできると思います

「どうか？」

刹那の声が聞こえる

時空管理局とは私たちの世界にあった連邦のようなものです

（連邦と同じ…）

なら、そこも…

「あのご聞いてますか？」

茶髪の女性が無視していると思われたのか、少し怒ったような声で

話しかける

「すまない」

「一つ聞きたいのですが、これはあなたがやったんですか？」

金髪の女性が指を指すと、その方向にはさっきの機体の残骸が転がっていた

「ああ」

「なら詳しい話を聞きたいので、ついてきてもらってよろしいですか？」

フェルトは刹那を見る

「私は刹那を信じて付いていく」

「…了解」

「あっ、申し遅れましたが、私は時空管理局機動六課スターズ分隊長高町なのは一等空尉です」

「同じく機動六課ライティング分隊長フェイト・T・ハラオウン執務官です」

「フェルト・グレイスです！」

フェルトは礼儀正しく挨拶する

若干声が上ずっていたような気がした



「あなたは？」

「刹那・F・セイエイだ」

これが刹那とフェルトの異世界での戦いの始まり

episode 1 (後書き)

駄文ですが、読んでくれたら嬉しいです  
意見などをお願いします

## episode 2

刹那たちはなのはたちに連れられ、今は機動六課隊舎隊長室にいる刹那とフェルト前には茶髪のショートカットの女性と銀髪の髪の小さい少女が浮かんでいた

「はじめまして、機動六課部隊長八神はやてです」

「リインフォース？ ですか！」

二人が挨拶してきたため、刹那とフェルトも挨拶する

「フェルト・グレイスです」

「刹那・F・セイエイだ」

自己紹介を終え、本題に入る

「早速ですが、二人はなぜ森にいたんですか？」

「わからない。俺たちは気がついたらあそこにいた。だが、こいつのおかげでこの世界のことについてはだいたい理解した」

刹那はポケットから青い宝石を取り出す

「はじめまして、マスターのデバイスのエクシアです」

『！喋った！？』

「そんなに珍しいんですか？」

フェルトが問う

「こんなに高性能なデバイスは見たことがないよ」

なのはは驚いていた

「刹那さん、このデバイスをどこで？」

これにはエクシアが答える

「私はこの世界に来たときにはこの姿になっていました。そしてマスターたちは地球から来ましたが、この世界の地球とは違う地球、並行世界から来ました」

「並行世界ということは二人は次元漂流者ということになるね」

「そうやね」

「あの〜次元漂流者ってなんですか？」

「何らかの拍子に他の次元世界に偶然漂流してしまった人たち、つまりは迷子のようなものです」

「元の世界に戻る方法はないのか？」

「今のところはわかりません」

「そうか…」

「みんな心配してるだろうな…」

フェルトの頭の中に仲間たちの顔が浮かんでいく

「それで二人は今泊まる場所はないということですね？」

「ああ」

刹那一人ならなんとかなるが、フェルトは…

「なら、機動六課で民間協力者として働いてみませんか？」

「どうしてです？」

「ミッドチルダでは、無断でデバイスを所持することは禁止なんですよ。民間協力者ならそういったことを未然に防げるし、それに時空管理局は正直言って人員不足なんですよ。だから力を貸して欲しいんですよ」

「…わかった。ただしデバイスに関してはここ以外での情報開示は遠慮してくれないか？」

「わかりました」

これで刹那とフェルトの機動六課での戦いが決まった

「これからよろしく頼む。あと敬語は必要ない。慣れてないからな」

「うん。二人ともええな？」

「うん。これからよろしくね！刹那君！フェルトちゃん！エクシアも！」

「よろしくね。刹那、フェルト、エクシア」

「よろしくお願いします！」

フェルトは少々固かった

「ハハッ、フェルトちゃん、敬語はいらないよ？」

フェルトは仲間の前でしか普通にしゃべらない

「はい」

「リイン、二人を隊舎の中の案内お願いな」

「はい！はやてちゃん！行きましょう刹那さん、フェルトさん！」

「ああ。頼む」

「お願いします」

そして三人は部屋を出ていった

「それにしてもここに男の人が来るのも久しぶりやな」

「そうだね。六課はほとんどが女性だからね」

「それにしても二人とも、森のガジェットはどうなってたん？」

「全部破壊されてたよ」

「どつゆつことや？」

「刹那君が全部破壊したと思う」

「ほんまかい!？」

「うん。それにまだまだ余裕みただったよ？」

「とんでもないな、刹那君は…」

刹那の強さに三人は驚いていた

「それにしても刹那君でかっこええな〜」

これを刹那が聞いたらどうなるのだろうか…

「まあ、なのはちゃんにはユーノ君がおるからな〜」

はやてはニヤニヤしながらなのはを見る

「えっ？ユーノ君はただの友達だよ？」

はやてとフェイトはその場でずっこける

そして告白もしていない無限書庫の司書長の恋は幕を閉じた

「フェイトちゃんは？」

なのははフェイトに話を振る

「私もそう思うけど、それ以上に刹那の目には決意とか悲しみとかあった気がする」

「どうしてそう思うの？」

「刹那の目を見ると、何か私と似たような目をしていたから…過去に何かあったと思うんだ」

「でもこれは刹那君の口から聞くしかないよね」

「そうだな。それに過去はどうあれ、明日から仲間なんや！みんなで何かあればフォローしたろう！？」



「うん！」

「そうだね」

そして刹那に頼もしい仲間が出来た  
フラグ予備軍もね…

機動六課の中を案内された二人は、ラインに連れていってもらった  
自分たちが使用する部屋にいた

「どうしたらいい？」

部屋には最低限の物資は置いてあった  
だが、問題はベッドが一つしかないということだ

「フェルト、俺はソファで寝る」

そう言って刹那はソファの上で横になる  
疲れが刹那の体を蝕んでいた  
刹那が眠りに就こうとしたその時、フェルトが刹那の腕を引っ張った

「どっした？」

刹那を見ると、フェルトの顔は少し赤かった  
少しもじもじしているし…

「刹那、一緒に寝ない？」

「…ハッ？」

そう言うとフェルトの顔がさらに赤くなった

「刹那は戦った後なんだからちゃんと休まなくちゃ…」

さらに赤くなっている

これではフェルトが爆発するのではないかと思った刹那はため息を  
つきながら答える

「…わかった」

フェルトの顔が明るくなった

(マスターも罪な男ですね)

エクシアはそう思った

そして二人は結局二人で寝ることになった



episode 2 (後書き)

今回は短めです

意見などあったらよろしく！

なにかリクエストもあればおねがいします！頑張ってみるんで！

### episode 3

刹那は夢を見ていた

白い服を着た茶髪のツインテールの少女と黒い服に身を包み金髪のツインテールの少女が戦っていた

戦況は金髪の少女の方が有利だった

結果は金髪の少女の勝利という形で終わった

だが、金髪の少女の表情はどこか悲しそうな表情をしていた

そしてそこで映像は途切れ辺りが真っ白になっていく

「うっ」

「刹那、大丈夫？」

「…ああ。心配ない」

刹那は目を覚ますとフェルトがCBの制服を着て隣で刹那の心配をする

（あれは一体…？）

刹那は夢のことを疑問に思うが、あの二人が誰かなのかは曖昧だった

ただ、なぜあの夢を見たのかはわからない  
刹那はため息をつきながら時計を見る

「六時…」

「少し早く起きちゃったね…どうするの？」

早く起きたからといって刹那たちは特にやることはなかった  
しばらく悩み、フェルトが提案した

「なら、隊舎内を見回ってみない？昨日も見たけど全部は見れてないし…どうかな？」

「別に構わないが…」

「なら行こっ！」

そして刹那はCBの制服に着替え、フェルトと共に隊舎内を歩くことになった

刹那とフェルトが隊舎内を歩いていると、何処からか物音が聞こえてきた

「なんだろう?」

「向こうから聞こえてきますね」

「…行ってみよう」

そして二人は物音がする方へ歩いていった

刹那たちが向かった先では、海の上にビル群の廃墟があった

「あっ、刹那君とフェルトちゃんおはよう!」

「二人ともおはよう」

すると、こちらに手を振っている高町なのはとフェイト・T・ハラ  
オウンの姿があった

「おはようございます」

「おはよう」

二人は挨拶をすると、前方に映っている映像の方に目を向けた

そこでは四人組の子供がガジェットと戦っていた  
それを見た刹那は顔を険しくした

(なぜ子供を戦わせている?この人間はなんとも思わないのか?)

刹那はそう思った

反政府組織カタロンの基地には子供がいた

だが、彼らは子供たちを戦わせたり、戦いをさせるために育てているわけではなかった

だが、この人間はどうだ?

平気で子供を戦わせてそれを見て心の中でどう思っているのかは知らないが、平気な顔でそれを見ている

刹那は時空管理局に歪みを感じた

だが、刹那のやることは変わらない

歪みがあればそれを断ち切る

そして刹那は心の中でその歪みを断ち切ることを決意した

『私も手伝いますよマスター。私はマスターと共にありますから』

エクシアから念話が聞こえ、刹那は心の中で感謝した

「お前たちが例の民間協力者か?」

すると刹那とフェルトは後ろを振り向くと、そこにはフェルトの髪より薄いピンク色のポニーテールの髪をし凛とした雰囲気を持った女性と小さい活気溢れた子供?がいた

「誰だ?」

「すまない。私はシグナムだ」



「ヴィータ」

「フェルト・グレイスです。よろしく願いします」

「刹那・F・セイエイだ。どう呼んでもらっても構わない」

「そうか…ならばセイエイ！私と模擬戦をしてくれないか？」

なんだこいつ？戦うことが好きなのか？

だが奴とは違って強い奴と戦ってみたいという感じだなと、刹那は思った

「了解した」

『すまねえな。あいつはいつもこういう感じなんだ』

念話でヴィータが謝ってきた

刹那は気にするなと念話を送った

「じゃあ、二人の模擬戦だね…みんな訓練一旦中止！」

なのはが廃墟にいる四人組にそう言うと、こちらに四人が向かってきた

「なのはさん、一体何があるんですか？」

青い髪の少女がなのはに訊く

「え〜とまず自己紹介からだね。これから民間協力者として一緒に

戦うことになる刹那さんとフェルトさんだよ」

「フェルト・グレイスです。これからよろしくね」

「刹那・F・セイエイだ。よろしく頼む」

「はい、みんなも自己紹介」

なのはに言われて、四人も自己紹介をする

「スターズ3、スバル・ナカジマ二等陸士です！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「ライトニング3、エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「ライトニング4、キャロル・ルシエ三等陸士です！それとこの子はフリードリヒです」

「キュル」

刹那とフェルトは目の前にいる竜を見て驚いていた

フェルトは子供たちを見て何か疑問に思っていたが、それを口することはなかった

「自己紹介も済んだな…ならばセイエイ模擬戦を始めよう！」

「了解」

「刹那！」

刹那は後ろを振り向くと、そこには心配そうな瞳で刹那を見るフェルトがいた

「怪我…しないかね？」

「…わかっている」

そうやって刹那はシグナムと共に廃墟に向かっていった  
フェルトは先ほどの目とは違う目で刹那を見ていた

「それにしてもすごいですね。海の上に廃墟があるなんて」

「にははは…実はこれ本物じゃないんだ…」

空中にモニターが現れ、そこにはなのはの顔が映し出されていた

「ホログラムのようなものか？」

「うーん、だいたいそんな感じかな」

なら相当高度な技術だろう

ソレスタルビーイングでさえも多分ここまでではできないだろう、と刹那とエクシアは思っていた

「そろそろ始めるか、セイエイ」

「そうだな…エクシア武器は全て非殺傷設定にしてあるか？」

「もちろんです」

「すまない。感謝する」

そして刹那は目を瞑り、頭の中でイメージするイメージを完了したと同時に刹那は瞼を開き、

「エクシア、セットアップ！」

刹那はガンダムエクシアとなった

刹那たちの模擬戦を見るメンバーは刹那の姿に驚いていた

服が変わり、体が騎士甲冑に似ているが、顔はV字のアンテナのよ  
うなものがあり顔は隠され、どこか青と白をベースとした機械のよ  
うなものを身にまとい、右手には折り畳まれた大剣、腰には大小二  
本の実体剣を装備した刹那の姿があった  
背中からは淡い緑色の粒子が放出されていた

「かつこいいですね…」

「そうだね…最初見たときもそれ思ったよ」

エリオとなのはは感想を述べる

「それにしても刹那から何か不思議な空気を感じるんだけど…」

フェイトの言葉になのはとヴィータ、そしてフェルトは気がついて  
いた

さっきまでとは何か違う雰囲気を感じている三人だった

「刹那…」

フェルトは刹那をずっと見ていた

シグナムは刹那の姿を見て驚いていた

「それがお前のデバイスか？」

「そつだ…これが俺のガンダム、『ガンダムエクシア』だ」

「フツ…では始めるか」

そう言うとシグナムは剣を構える

刹那も右手のGNソード改を展開して構えた

そして二人の戦いが始まる

「ヴォルケンリッターが将、烈火の将シグナム参る！！」

「ガンダムエクシア、刹那・F・セイエイ、出る！！」

そして二人の模擬戦が始まった

episode 3 (後書き)

いや〜今回は何となく頑張ってみました！

ここまでしたのは初めてだと思います

ただし、戦闘描写がうまく書けるか不安…

意見やリクエストもどしどし送ってください！

ユーザーじゃなくてもいいですからね！

## episode 4

刹那VSシグナムの模擬戦が開始した  
最初に動き出したのは刹那だった

背中のGN粒子を吹かしてシグナムに近づき、右手のGNソード改を振りかぶる

「ハアアアアアアアアア！」

GNソード改をシグナムに振り下ろす

シグナムはすかさずデバイス『レヴァンティン』でGNソード改を受け止める

「くうっ！」

思ったよりパワーがあったのかシグナムの体は少し後ろに押されてしまう

刹那は一度ソード改をもう一度シグナムに叩きつけようとするがシグナムは少し距離を離す

そしてシグナムの表情には笑みがこぼれていた

「やるなセイエイ。只者でないことはうすうす感じてはいたがここまでとはな」

今の一撃で刹那が常人とは違うことが分かったらしい

シグナムは嬉しそうだった

刹那は再びソード改を構える

シグナムも剣を構える



「レヴァンティン！カートリッジロード！」

ガシユン×1

すると、シグナムの剣は炎を纏う

それを見た刹那は驚くが、すぐに警戒をする

警戒する刹那にエクシアから念話が耳に響いた

『マスターあれはカートリッジシステムです』

『カートリッジシステム？』

『ようは一時的により強力な攻撃が可能だということです』

『そうか…お前にはついていないのか？』

『私にも一応ありますが、この状態では使用は難しいかと…』

『そうか』

そしてエクシアとの念話を終えて刹那は再び前方にいるシグナムに意識を集中させる

だが、シグナムは刹那がエクシアと念話をしている時攻めてはこなかった

「もう念話は済んだか？」

「！…気づいていたのか？」

「正々堂々と戦わなくては騎士としてのプライドが許さん」

「そうか……なら！」

「行くぞ！」

シグナムが炎を纏った剣を構えながら刹那に突進してくる

それに対して刹那はGNソード改を折り畳みソードライフル改で応戦する

桃色の光がシグナムに向かって放たれるが、シグナムはそれをことごとくよけ、刹那に接近する

そしてシグナムは飛び上がり、刹那に向かって剣を振り下ろす

「紫電一閃！！！」

刹那はそれを再び展開したGNソード改で受け止めるが、シグナムの方が若干パワーが上なのか少しずつ押しやられる  
だが、刹那は踏ん張ってGNソード改を横なぎに払う  
シグナムは後ろに飛んで再び刹那と目を合わせる

その頃刹那とシグナムの模擬戦を見ているメンバーは戦いをじっと見ていた

FW四人は啞然としていた

「すごい。シグナムとほとんど互角…」

フェイトが戦いを見ながら感想を述べる

たしかに刹那はこの手の戦いは二回目だが、あのシグナムとあそこまで戦える人間はざらにいない

「それに刹那君まだまだ余裕がありそうだよ」

映像見ながらなのは刹那を見ながらそう言う

顔は隠れてよく見えないが、まだ余裕という感じがした  
すると、ティアナがなのはに質問する

「なのはさん、彼は何者なんですか？」

「彼は次元漂流者で魔法での戦闘は二回目だよ」

「そうですか……ありがとうございました」

そう言うティアナの表情は明らかに暗くそして何か悔しそうだった  
エリオも刹那の戦いに見惚れていた

「フェルト、刹那ならきつと大丈夫だよ」

フェイトにそう言われたフェルトは頷いたあと再び画面に目を戻した

刹那とシグナムの戦いはほぼ互角だった

「そこ!!」

刹那がソードライフル改でシグナムを狙い撃つ

だが、それをシグナムは剣で防いだりよけたりして隙すら作れない  
そしてシグナムが再びカートリッジロードをして剣から炎が溢れる

「紫電一閃!!」

「くっ!!」

シグナムの剣を受け止めるが、威力を相殺しきれず吹っ飛ばされて  
しまう

刹那はビルに衝突してそこから砂埃が舞う

「彼女はすごいですね。マスターをここまで追い込むなんて」

エクシアはシグナムを高評価した

そして刹那は体を起こして、要背部のGNビームダガーを抜いて視  
界が悪い中それを放る

一見闇雲に投げたように見えるが、刹那は相手がどこにいるか分か  
っているかのように投げた

そして刹那は再びGNソード改を構えて移動する

刹那をビルに吹っ飛ばしたシグナムは刹那が出てくるのを待っていた  
すると、シグナムに向かつて煙の中から飛んできた

それを見たシグナムは油断していたわけではないが、少し反応が遅  
れたためそれをよける

だが、よけた方向が悪かった

「うおおおおおおお！！！」

「！！！」

シグナムはよけた方向を見るとそこにはGNソード改を構えてこち  
らに突っ込んでくる刹那がいた

「ハアアアアアアア！！！」

「くうっ！！！」

「そこ！！！」

「！」

GNソード改を受け止めるシグナムだが、そこからすかさず蹴りを入れてきた

蹴られた腹を押さえて刹那を見るが、刹那はビームサーベルを抜いてシグナムに切りかかる

それに反応できなかったシグナムは咄嗟に目を瞑る

だが、痛みなどは来なかった

ゆっくり目を開けると、目の前には桃色の光が止まっていた

「俺の勝ちだ」

「…フツ…そうだな」

模擬戦は刹那の勝利で幕を閉じた

episode 4 (後書き)

なんか戦闘描写がうまく書けん…

本当にこれを読んでいる人はリクエストなどはないのですか？

可能な限り尽力しますよ

episodes (前書き)

10000PV突破!

よかった!頑張ったよかった!



## episode 5

刹那がビルに吹っ飛ばされた時、模擬戦を見ているメンバー

「やりすぎだと思っけどなシグナム副隊長」

若干苦笑いをしながら言うのは

「仕方ねえよ。あいつはバトルマニアで一旦スイッチが入ると加減とかきかなくなっちまうんだからな」

「でも、さすがに二回目の戦闘でここまでする必要はないと思っけどな…」

すると、煙の中からシグナムに向けて刹那が放ったGNビームダガーが飛んでくる

「うそっ！？あんな視界が悪い中であそこまで正確に狙えるなんて！？」

「まるで見えているかのようなコントロールだね」

スバルの疑問にフェイトの考えを述べる

そしてシグナムがそれをよけると、よけた方向にはGNソード改を構えているシグナムに接近する刹那がいた

シグナムがGNソード改を受け止めるが、刹那が蹴りを入れてシグナムをビルにぶつける

そして刹那がビームサーベルを引き抜く

シグナムは反応に遅れて躲すことができず、ビームサーベルはシグ

ナムの目の前で止められて勝負は刹那の勝利で終了した

「シグナム副隊長が負けた…?」

ティアナは驚いていた

魔力ランクや戦闘経験からいって六課の中でもトップクラスである  
うシグナムを戦闘回数がまだ二回の民間協力者に負けたのだから  
そしてティアナは心の中で悔しがる

「よかった刹那…私も…!」

フェルトは心の中で何かを決心した

その頃刹那とシグナム

「強いなセイエイ。お前の強さは底が知れん」

「そんなことはない。俺の戦いは……人を傷つけるだけだ……」

「？最後の方が聞こえんのだが…」

「いや、なんでもない」

刹那の発言がうまく聞こえないシグナム  
それはどこか悲しそうだった

「立てるか？」

「いや、先程の蹴りと衝撃で思うように体が動かん…」

「…そうか」

そして刹那がシグナムを抱きかかえる

「／／／セ、セイエイ!？」

「どうした？」

「い、いや…これは／／／」

刹那は動けないシグナムをお姫さまだつこで抱える  
シグナムは顔を赤くするが、刹那はそれを気にしない  
そして二人はフェルト達のもとへ向かった

そしてフェルトたちは刹那たちのもとへ向かおうとしていたが、

「おっ、こつちから行く必要はないみたいだぜ」

「えっ？」

ヴィータがそう言って上の方を見ると、刹那がシグナムを抱きかかえてこちらに向かってきていた  
お姫さまだっここでこちらに向かってきているのだ  
そして降り立ち、刹那はバリアジャケットを解いてソレスタルビーイングの制服になる

「せ、セイエイ、そろそろ下ろしてもらって構わない…周囲の視線が痛い／＼／」

「？わかった」

そして刹那はシグナムを下ろす  
シグナムは相変わらず顔が赤い  
刹那は風邪かと思っていた

「せ、刹那、どうしてシグナムさんを？」

「？…ああ、動けそうないみたいだったからな。ああさせてもらった」

「そ、そう」

フェルトの問いに刹那は無表情で答える

「シャーリー、刹那君の能力どうだった？」

すると、いつの間にか眼鏡をかけている女性がいた

「あなたは？」

「どうもシャリオ・フィニーノです。シャーリーと呼んでください。皆さんのデバイスの整備などしています。それと…」

「？」

「あなたのデバイスを調べてもいいですか！？」

「断る」

即答したことによりシャーリーの元気が少し失われる

「ハハハッ…それでシャーリーどうだった？」

「あっはい！刹那さんの魔力値はSSランクでした！」

「うそ!?!？」

「マジでか!?!？」

フェイトとヴィータが驚きの声を上げた

「相変わらずすごいんだね刹那は…」

「そうなのか？」

「それにしても刹那さん、すごかつこよかったです！」

エリオが刹那に近づいてきて、感想を言う

「エリオは刹那の試合を見てはしゃいでいたんだよ」

「フェ、フェイトさん／＼」

エリオが顔を真っ赤にしながらそう言う  
そして模擬戦はここでお開きとなった

医務室では、刹那とシグナムが怪我したところを治療していた

「はい！これで終わり！」

「相変わらず料理以外は腕がいいな」

「むう〜シグナム、以外は余計よ！」

シグナムの言葉に敏感に反応するシャマル  
刹那はシャマルの治療を見て心の中で感心する

「それにしても刹那君すごいね！シグナム副隊長を倒しちゃうなんて！」

なのはが再び感想を述べる

「だが、セイエイはあれが本当の実力とは思えない」

「シグナムはあれが刹那君がまだ本気じゃないと言いたいんか？」

「はい」

「そうなの刹那!？」

フエイトが訊く

「いや、多分あれが今の俺の実力だろう。そうだなエクシア」

「はい。現時点ではそうなりますね」

(現時点ではって、SSランクより実力があるっていうんか!?)

はやてが心の中でそう思った

てか模擬戦のとき出していなかった(焦)(作者)

「刹那、今日はどうするの?」

実際、今日は特にこれといってやることはなかった

「まだエクシアを使いこなせていないからな。後で訓練でもするさ」

「そっか。無茶はダメだよ」

「分かっている」

「フェルトちゃんて刹那君のこと、そこまで心配しているんだね」

「はい。これ以上大切な人を失いたくありませんから」

「えっ？あつごめんなさい」

「いえ、過去を気にしていても何もありませんから」

フェルトは少し表情を暗くするが、すぐにそれはなくなった

刹那とエクシアはフェルトがここまで強くなっていたことに今さら気がついた

そしてその場はお開きとなった



## episode 5 (後書き)

さあ次回は初出勤となるかな!?

今のところリクエストは刹フェルという要望が強いですね!一票だけだけど…

アンケートもやろうかと思うので、リクエストや意見もよろしくお願ひします!

ユーザーじゃなくてもOKです!

episode 6

刹那はその後FW陣の訓練が終わったあとに自分も訓練をした今のままだったらエクシアの力を十分に発揮できないからであるそして今は訓練が終わったため、食堂にいる隣にはフェルトがいる

「それでどうだった、エクシアは使いこなせそう?」

「わからないが、エクシアは俺のガンダムだ。必ず使いこなしてみせるさ」

「そう。…そうだよな」

そして二人はその後は何も喋らないで飯を黙々と食べ続けるその沈黙を破ったのがエクシアだった

「マスター、トランザムのデータの構築が終了しました。あと、GNシールドも装備可能となりました」

「そうか。…エクシア、『ダブルオー』の状態はどうなっている?」

「『ダブルオー』に関してはデータはあります。ですが、まだまだ時間はかかりますし、オーライザーも構築しなければなりませんから」

「そうか…引き続き頼む」

「了解しました」

刹那はエクシアにダブルオーのデータがあると言われそれを造って  
もらっていた

エクシアだけではこの先は厳しいしそれに刹那は嫌な感じがしていた  
そう遠くない時に何か起きるような気がしていた

「刹那、どうかした？」

フェルトが刹那の顔をのぞき込んでくる

感情が表情に出ているのだと刹那は思い、「気にするな」と言った  
フェルトは「そっか」と言って再び食を進める

そして二人は食事を終えて食堂を後にして、部屋に向かう

「あれ？二人とも、もう夕食終えたの？」

歩いているとなのはが二人に聞いていくる

「はい」

「そうなんだ。あっ、刹那君明日も訓練するの？」

「そのつもりだ」

「そっか。じゃあまた明日ね」

「ああ」

「おやすみなさい」

そして二人は再び部屋に向かう

一方隊長室では隊長陣が会話をしていた

「今更だけどシグナムが負けるなんてな」

話は刹那とシグナムの模擬戦のことである

「そうだよな。まだ魔法を使ってでの戦闘が二回目なのにシグナムに勝っちゃうなんて」

フェイトは心底驚いていた

「私もセイエイは只者じゃないとは思っていたがあそこまでとは思わなかったな」

「でも、視界が悪い中であそこまで正確に狙いを定めることなんて難しいんじゃないか？」

はやての前に映像が映し出される

それは煙の中からナイフにも似たものが飛んできてそれをシグナムが躲しているところだ

たしかにこれはデバイスの補助を受けていても難しいだろう

だが、それを刹那はやつてのけた

「はい。私もあれを見てみてただのまぐれかと思いましたが、あの後のセイエイの行動を見る限りあれは狙って行なったものだと思います」

「やっぱりか…」

「シグナムは刹那から何か感じた？」

「どうした？テストアロツサ」

「いや、ここで刹那と話している時やバリアジャケットを展開するとき何かを感じたから…シグナムはどうだった？」

シグナムは少し考え込むような態度を見せる

「最初は分からなかったが、剣を交えているとセイエイからは決意にも似たようなものを感じはしたが…それがどうかしたのか？」

「いえ…それならいいんですが…」

フェイトは少し納得がいかないようだったが、話ははやてによって切り替えられる

「それにしても刹那君に抱っこされているときシグナムの顔が赤かったのはおもしろかったな」

それを聞いたシグナムを含むメンバーは顔を赤くした

「それでどうやったんや？刹那君の近くにいて」

「わかりませんよ／＼！ただ、恥ずかしいという気持ちしか…／＼」

シグナムも騎士とはいえ一人の女性だ

あんなことを平然とやられれば恥ずかしい気持ちにはなるだろう

「そうなんやな…シグナムは刹那君に…」

「主？」

「私も負けへんからな！シグナム！」

「…ハツ？」

はやてを除く全員ははやてが何を言っているのかよくわからなかった  
ただ、フェイトはこの意味を理解したらしく心の中で闘志を燃やしていた

刹那とフェルトは部屋に着いたあと、二人ともベッドに腰掛けていた

「…エクシア」

「どうしたんですか？フェルト」

フェルトがエクシアに話しかける

「私にデバイスを作ってくれないかな？」

それを聞いた刹那は驚いた表情でフェルトを見る

エクシアは予測をしていたのか驚いているのか黙っている

「私も刹那と一緒に戦いたい。そして刹那を守りたい」

「…フェルト…」

フェルトの瞳は決意の意思で満ちていた

「…エクシア、どうなんだ？」

「私の中にある他のガンダムのデータを使い、シャーリーに頼めば可能だと思います」

「そっか…ありがとう、エクシア」

フェルトは微笑みながら礼を言う

「しかし…いいのか？」

「私だけ戦わないのはダメだと思う。刹那とこの人たちを守りたいの」

「……わかった。明日、シャーリーにきいてみよう」

「ありがとう刹那」

そして二人は今回はフェルトがベッドで刹那がソファで眠ることになった



## episode 6 (後書き)

さて、いよいよフェルトにもデバイスが!?

ここでアンケートです

フェルトのデバイスの名前と武器は何がいいですか？

なるべくフェルトに負担がかからないようにお願いします

そしてバリアジャケットのデザインも追記をお願いします

来週の土曜日までとします

短い期間ですがいろいろな意見を待っています

**episode 7 (前書き)**

アンケートはあと五日です

アンケートが終了したと同時にキャラクター設定を書きたいと思  
います

では、アンケートよろしく！

## episode 7

フェルトは夢を見ていた

石造りの家がいくつもあり、人はどう見ても中東の人々であったが、景色が変わり夜となる

そして一人の少年が一件の家に向かって走っている

その少年はフェルトが知る人物によく似た人物だった

そして少年は家の中に入る

家からは少年を心配していたと思わせる男性と女性の声が聞こえるが、それは安堵の声から何かに恐怖しているような声に変わる

視点が変わり、フェルトはその家の中を見ていた

少年が二人に銃を向けており、二人とも怯えている

だが、それを見る少年の目は特に何も思っていないような操られているような赤い瞳をしていた

そして銃声が鳴り響くと二人のところから赤い液体が溢れ出してくる

そして家から出ていく少年の目はやはり何かに操られているような瞳をしていた

そこで意識が薄れてくる

「う、ん…あれ？」

フェルトは目を覚ますと体を起こして夢のことを思い出して考える

(あれって、刹那…なのかな?でも…それだったら…)

フェルトはそう思いながらソファで眠っている刹那を見る  
ソレスタルビーイングは仲間の過去の情報は太陽炉と同じくSレベルの機密事項である

仲間の過去を知っていたとしてもごくわずかのことしか知らない  
もちろんフェルトも仲間の過去を全て知っているわけではない  
そんなことを知らなくてもソレスタルビーイングはフェルトの全てであるためそのようなことは関係なく全員が仲間を信じている  
だが、フェルトは先程見た夢がどうしても気になる

刹那が中東出身ぐらいしか知らないフェルトは今回の夢で刹那が過去にどのような人生をおくっていたのか気になってしまった  
でも、それを知るのには難しいだろうとフェルトは思った

そして時計を見ると、そろそろFWの午前の練習が終わる頃で少し眠りすぎたかなと思いつつフェルトはベッドから出て顔を洗い、ソレスタルビーイングの制服に腕を通す

「おはようございます、フェルト」

「うん。おはようエクシア」

エクシアに話しかけられたフェルトは挨拶をして刹那を起こす  
そして起きた刹那にフェルトは笑顔で朝の挨拶をして、刹那は顔を洗い制服に着替える

そして二人は部屋を出て食堂に向かう

食堂で朝食をとった刹那とフェルトはデバイスルームに向かっていた理由は昨日話していたフェルトのデバイスについてである  
そのことをシャーリーに話すために二人はデバイスルームに向かっていた

そしてデバイスルームの前につき、ドアが開くとなのはとシャーリーとリインとFWの四人がいた

「あつ、刹那君、フェルトちゃんおはよう」

「おはようございます」

「ああ」

フェルトと刹那は普通に挨拶をする

「一体、みんなでどうしたんですか？」

「ああ、FWの新デバイスについて説明をしていたんです」

「新デバイス？」

刹那とフェルトは映像に映っているものを見る  
そこには待機状態のデバイスと思われるものがあつた

「お二人はどうしてここへ？」

エリオに聞かれる

「フェルトのデバイスを作ってもらいに来ました」

「フェルトちゃんの？」

エクシアの言葉になのはが反応する

「彼女が自ら望んだことです。六課の人たちとマスターを守りたい  
のでしよう」

それを聞いたなのはフェルトを見ると、決意の顔でなのはを見て  
いた

「…うん。シャーリー、フェルトちゃんのデバイスを作ってくれな  
いかな？」

「いいんですか？なのはさん」

「本人が望んでいることなら止められない。それにフェルトちゃん  
のことは私たちが守るしね？刹那君？」

「…俺がフェルトを守る」

刹那は当たり前と言わんばかりの口調で言う

それを聞いたフェルトは少し頬が紅潮していたが刹那は気づかない

「フェルトのデバイスには今から送るデータを参考にしてください」

そしてエクシアからデータが送られる

それを見たシャーリーは鼻息を荒くしながらモニターを見ていた

そのシャーリーを見た全員が彼女が一瞬違う人物に見えたようだった  
すると、赤いランプと警報が鳴る

「一級警戒体制!？」

「グリフィス君!」

「はい!教会本部から出動要請です!」

そしてこれが機動六課、最初の任務である

現在、機動六課FW陣はへりに乗り込み移動していた

内容は山岳リニアレールに積み残されているロストロギア『レリック』の回収である

だが、リニアレールは三十機のガジェットの一部に侵入され、制御不能に陥ってた

未確認のガジェットも確認されていた

刹那とフェルトはその場で聞いたロストロギアという言葉を聞いて疑問におもっていたが、リインが教えてくれ意味を理解した

そしてこの場には今はフェルトはいない

フェイトもこの場にはいないが後で合流するそうだ

(なんだ？この感じは…)

刹那は何かを感じていた

この任務で刹那は何かが出てくるような気がしていた

「ヴァイス君、私も出るよ。私とフェイト隊長と二人で空を抑えろ！」

「うっす。なのはさんお願いします！」

そしてヘリのハッチが開かれる

なのはが出撃準備に入る

「キャロ…」

なのはがキャロに近づくと

「そんなに緊張しなくていいんだよ。離れても通信で繋がってる。

一人じゃないから。キャロの魔法は誰よりも強くて優しい魔法なんだから…ねっ？」



そしてなのはが再び出ようとするが、刹那もハッチに近づくと

「刹那さん？どうしたんですか？」

「…俺も出る。たぶんこのまままで終わらない…そんな気がする」

「刹那君…。…うん。わかった」

「ありがとう」

少し微笑むとそれを見たなのはが少し顔を赤くするが、刹那はすぐに元の表情に戻る

そして、なのはが飛び降りる

「レイジングハート、セーットアップ！！」

そしてなのはを桜色の光が包み込み、そこから出てきたのは白いドレスにも似たバリアジャケットを着て手に杖を持ったのはがいた

「スターズ1、高町なのは、行きます！！」

そして刹那はFW陣を見る

「お前たちは強い。その力を使うのであれば目的を見失うな」

そして刹那はティアナの頭の上に手を置く

「お前が何を考えているのかはわからない。だが、お前はひとりじゃないんだ」

その言葉を聞いたティアナは意味が分かっていないような表情をしていた

そして刹那は再びハッチの前に出る

「お前たちは目の前のことに集中しろ。何かあれば援護する」

「「「「はい!!」」」」

「…行くぞ、エクシア」

「了解」

「エクシア、セットアップ！」

そして刹那はガンダムエクシアになる

「ガンダムエクシア、刹那・F・セイエイ…目標を駆逐する!!」

青白い粒子を吹かせて刹那は出撃した

へりから出撃した刹那を見ていた者がいた  
その男は不敵に笑っていた



**e p i s o d e 7 (後書き)**

今回はかなり省略したところがあります

グダグダな駄文ですみません

意見やリクエスト、アンケートをお願いします！

## episode 8 (前書き)

アンケートの途中経過！

今のところはデュナメス、ケルティム、ヴァーチエ、セラヴィーが多いですね

デバイス名は上のものとオリジナルのものがありますが、私としてはオリジナルがいいのですが…

ということでアンケートは土曜日までですよ！

待ってます

あとPV2万超え！やったーーーー！！！！

## episode 8

刹那はなのはとともに空中にいるガジェットを殲滅していた

「アクセルシューター…シューシューシューッ！」

桜色の大量の魔力弾が何機ものガジェットを破壊する  
刹那もGNソード改とGNブレイドで敵を切り裂いていく

「遅い！！」

後ろに回り込んでガジェットを切り裂く

一人が接近して破壊してもう一人が中、遠距離でガジェットを落とすしていく

二人の連携は初めてにしてはなかなかのものだった

そして刹那はGNソード改を折り畳み、GNブレイドも腰にマウン  
トして要背部のGNビームダガーをガジェットに放る

ダガーはガジェットに当たり爆散する

「！なのは！！」

刹那はすかさずなのはの後ろにいたガジェットにGNソードライフ  
ル改を連射する

だが、ビームはガジェットに当たる前に霧散して消える  
刹那は心の中で舌打ちをする

「エクシア！」

「了解！」

そして背中についているGNドライブの回転数が上がり先程より粒子放出量が上がリ、粒子圧縮率を上げる  
そして再びビームを放ち、今度はAMFを貫通して敵に当たり爆散する

刹那はそのままなのはに背をあずける

「にはは…ありがとう刹那君」

「油断するな。…来たか」

「えっ？」

すると、敵のガジェットの二機が黄色い三日月形の斬撃によって破壊される

「なのは！刹那！」

「フェイトちゃん！」

フェイトがやって来た

「遅れてごめん…」

「うっん。平気だよ」

なのはは笑顔で答えるとすぐに表情が変わり目の前のことに集中する

「…行くぞ」

「「うん!」」

そして刹那はGNソード改を展開して敵に切りかかり、なのはは中距離攻撃で敵を撃ち落とし、フェイトも刹那と同じように切りかかり時々ハーケンセイバーで敵を破壊していく

刹那はGN粒子を吹かせて左手にGNブレイドを持ち、接近戦で敵を落としていく

だが、刹那は出撃してから何か頭に響くものがあった

(なんだ?これは…脳量子波なのか?この世界で?)

刹那は頭に響いてくるものが脳量子波だと考えた

そう考えているうちに空中のガジェットを殲滅した刹那たち

「こちらロングアーチ!空中のガジェット反応消失!」

ロングアーチからの通信で空中のガジェットは殲滅したことが分かった

三人は一箇所に集まる

だが、再びロングアーチから通信が入る

「!スターズ分隊、ライティング分隊にガジェット以外の反応が接近中!」

「ガジェット以外の反応!?!」

「シャーリー!それはなんなの!?!」

「わかりません!その反応の周りだけジャミングがひどく…」



「エクシア、まさか…」

刹那はある一つの可能性にたどり着く  
だが、それはありえないと刹那は思った  
そんなことはありえない。そんなことがあれば自分たち以外に刹那  
たちの世界から来たということになるからだ  
だが、エクシアもその可能性にたどり着いていた

「おそらくGNドライブ搭載型でしょうね…それも擬似太陽炉搭載  
型」

「ということは、俺たちの世界から来たものがほかにいるというの  
か？」

「その可能性が非常に高いでしょうね」

「スターズー！ライトニングー！急いで救援に向かってください！」

「了解！！」

「俺たちも行くぞエクシア！」

「了解！」

そして刹那たちはリニアールに向かって飛翔した

その頃四人はガジェットを全機破壊してレリックを回収した  
回収する前にエリオが新型のガジェットに投げ飛ばされて意識を失  
ったまま落下して、それを追うようにキャラも飛び降りてエリオを  
抱きとめる

この時ロングアーチとフェルトは焦ったが、はやてを含む隊長陣は  
平然としていた

その理由はこれによりガジェットから発せられるAMFの効力が弱  
まり、キャラの本当の力が発揮されるためである

そしてキャラは使役竜フリードに一言謝りそして覚悟を示し、キャ  
ロのレアスキル『竜魂召喚』を発動して巨大化したフリードを完全  
に操ることに成功。そして目を覚ましたエリオとともに新型ガジエ  
ットを破壊するなどハラハラする場面があった

リインは操縦室でリアールの暴走を止めた  
そして四人とリインはレリックを回収したことで警戒を緩めていた  
だが、

「こちらロングアーチ！今こちらにアンノウンが接近中！」

「えっ！？どうしようティア！？」

スバルは慌てていた

「わからないわよ！」

ティアナも少し冷静ではなかった

アンノウンが現れたことで動揺していた

「今そちらに隊長たちと刹那さんが向かっています！その間…ザザ…」

「えっ！？シャーリー！どうしたんですか！？」

シャーリーからの通信がノイズが入って切れてしまう  
すると、車両が爆発音とともに揺れ始める

「えっ！？なっ何！？」

「何が起きているんですか！？シャーリーさん！」

いくら呼んでも通信が帰ってこない  
すると、車両の天井が破壊される

三人は目を瞑り目を手で隠す

そして音が止み目をゆっくり開け上を見上げると、そこには漆黒にも似た色のボディをして肩には砲台、そして最大の特徴である背中から放出されている赤いGN粒子を放出している機体はこちらを見下ろしていた

刹那たちが到着すると、刹那はその機体を見て　　顔はフルフ  
エイスで覆われているためわからないが　　目を見開いていた  
その機体は過去に窮地に陥った刹那たちを助け、刹那たちが彼らの  
行為を紛争幫助対象として武力介入をして、そのあとあの男によっ  
て殺されたパイロットの一人が乗っていた一機  
その名は

「ガンダムスローネ!?」

ヨハン・トリニティが搭乗していた機体『ガンダムスローネアイン』  
であった

「マスター!あそこにはスバルさんたちがいます!」

「!行くよ、フェイトちゃん!」

「うん!」

「!待て!あれは俺たちの世界の機体だ。俺とエクシアでやる」

「でも…!」

「心配するな…」

そして刹那はスローネに接近する  
スローネもこちらに気がついたのか、こちらに体を向けてビームラ  
イフルを放つ

「エクシア!GNシールド、展開!」

「了解！GNシールド、セットアップ！」

そして刹那の左手に青い盾が装備される

ビームライフルをかわしながらスローネに接近して展開したGNソード改で切りかかる

が、スローネはそれを移動してかわして再びビームライフルと肩のGNメガランチャーを連射する

それを刹那は左右によけながら時には盾を使用しながら接近して、GNソード改で攻撃する

スローネもよけるのは無理だと判断したのかビームサーベルで応戦してくる

（人に気配を感じない…ならば！）

刹那は強引に剣を押し込みスローネを下がらせる

スローネも負けじと向かってくるが、パワーで負けている

「そこ！」

そして刹那は盾を左手から外して、右脇腹の方からGNビームサーベルを引き抜き、サーベルを持っているスローネの手を切り裂く  
切断面は機械がショートしたりしていた

このスローネは人などは乗っていないくて無人のロボットだった

その時点で刹那は容赦はいらないと思い、再び切りかかる

スローネは一旦距離を取りメガランチャーで攻撃をする

狙いを定めさせないためにいろいろな動きをして相手を翻弄する

そして刹那はビームサーベルで切りかかるが、スローネはそれをよけるが刹那はそのビームサーベルを相手に放る

ビームサーベルはスローネには当たらなかつたが、態勢を崩して隙

が生まれた

そこを見逃さないで刹那はGNソード改で突撃する

「これが、俺たちの…!!」

GNソード改で一閃

「ガンダムだ!!」

スローネはスパークを起こして、小規模なが爆発が起きる  
そしてスローネはメインカメラは光を失い動かなくなった

**episode 8 (後書き)**

感想どしどし送ってください！

アンケートもよろしくお願いします！

## アンケート結果発表とキャラ設定

今回はアンケート発表とキャラ設定です！  
では、どうぞ！

主人公

名前：刹那・F・セイエイ

容姿：セカンドシーズン

デバイス：エクシア

管制人格：女（CVはお任せ）

バリアジャケット：ガンダムエクシアリペア？（以降は省略してガンダムエクシア）

待機状態：青い宝石

次はアンケート発表を兼ねたキャラ設定

名前：フェルト・グレイス

容姿：セカンドシーズン

デバイス：アルテミス

管制人格：男（CVはお任せ）

バリアジャケット：基本は緑（デザインは読者におまかせ）

武装は主にデュナメスとケルディムのもを採  
用します

待機状態：緑の宝石が付いた指輪

という感じでどうでしょう？



いろいろな意見をありがとうございました！

## アンケート結果発表とキャラ設定（後書き）

名前をくれた白銀さん、ありがとうございます！  
他の方々もどうもありがとうございます！

episode (前書き)

3万PV突破！

ユニークも7千突破！(\*^^^)  
V

## episode 9

スローネを捕獲して刹那たちは六課の隊舎に帰還した

今は隊長室にいる

そしてはやてが口を開く

「単刀直入に聞くで？これを刹那君とフェルトちゃんは知っているんか？」

映像に映し出されるのは黒い装甲に赤い粒子を放出している機体『ガンダムスローネアイン』

あの後刹那はスローネをデバイスルームに運びシャーリーに頼んでスローネの情報を六課だけの機密情報にしてもらった

地上本部に送れば間違いなく戦力としてプラスになるだろう  
それでは間違いなく争いの火種になりかねない

「この機体は私たちの世界で言う『MS』というもので、この世界で言う質量兵器です」

「そしてこの機体の他にもう二機、接近戦とサポートを主とした機体があります」

フェルトとエクシアが説明をする

「ならこの機体のせいでロングアーチからの通信ができなくなったのかな？」

「スローネやエクシアから放出されている粒子には通信などを遮断する性質がある。おそらくそれが原因だろう」

「でも刹那さんの時は何も起きなかったですう」

リインの言うとおりでスローネとエクシアのあの粒子は同じであるならば同じような現象が起きているはずだが、エクシアは起きずスローネはその現象が起きなかった

「でも、それが本当だったら指揮系統がズタズタになるやないか？  
たしかにまたスローネなどが現れてしまった場合、通信などができずに現場が混乱してしまう」

「エクシア、お前ならなんとかなるんじゃないか？」

刹那がエクシアにどうにかならないか聞く

「はい。ここの魔法は科学も混じっているようなので、私の中にあるデータを使えば可能だと思われます」

「ほんまか！？」

「後で私をロングアーチの方々に所へ持って行ってもらえますか？」

「はいですう！」

「これで心配はなくなったね？はやてちゃん」

「うん。それでフェルトちゃんのデバイスに関してなんやけど……」

そう言うてはやてが懐から緑色の宝石が付いた指輪を取り出す

「それは？」

フェルトが聞く

「いやなあ？聖王教会の方で見つかったらしいんやけどな…」

すると、緑の宝石が光り出して、はやてから離れてフェルトのもとに移動する

そしてフェルトの目の前で浮いている

「フェルトちゃん、それはデバイスや」

「私のデバイスですか？」

「別にシャーリーが作ったわけやないんよ？聖王教会の方にあったものらしいからな」

「どうして聖王教会の方にあっただんですか？」

「それは私にもわからへんよ」

はやてにもわからないらしい

そしてフェルトは手を差し出す

指輪はゆっくりとフェルトの手に乗り、そして喋り始める

「あなたがマイスターフェルトですね？」

声は男の声だった

どうやらインテリジェントデバイスのようだった

「そうだけど…」

「私は『アルテミス』と申します。そこにいる刹那様とあなたを守るために生み出された者です」

「…誰がお前を生み出した？」

「…それはあなたがよくわかっているはず」

アルテミスにそう言われて刹那は考えを巡らす  
が、いったい誰なのかがわからない

「…わからないな」

「いずれ現れるでしょう。あなたたちの力になるために…」

と、意味深なことを言うアルテミス  
だが、刹那は自分たちの仲間の中にいる者だと判断した

「それじゃあ、フェルトちゃん明日そのデバイスで訓練してみよう  
か？」

「…はい。よろしくお願いします」

「俺も付き合おう」

「ありがとう刹那」

「でも一体誰がこのデバイスを作ったんやろうな？」

そしてこの場はお開きとなり刹那ははやてにエクシアを渡してフェルトと共に隊長室を後にする  
一つの疑問を残して

そして翌日、刹那たちは訓練場に行った  
なのはたちはいつも通りFWたちの訓練をして、それを終えて今は刹那たちの訓練を見学している  
そして一方で刹那とフェルトはフェルトのデバイスの訓練をしていた  
シャーリーが新デバイスを作れなかったことに激しく涙していたが、その一方ではアルテミスの解析を強く迫ったがアルテミスの方から断られてしまい断念した

「フェルト」

「うん…アルテミス、セットアップ！」

そしてフェルトが緑の光に包まれる  
そこに緑色のバリアジャケットを着て、両手にはケルディムの銃が



握られていた

「私はデュナメスとケルディムを参考にして作られました」

「デュナメスの…」

フェルトはそう言って何かを考える

「よし、シャーリー、ガジェットを出してくれるか？」

刹那がシャーリーにそう言う

「わかりました。何機にしますか？」

「十機で頼む。…エクシア、セットアップ」

そして刹那もバリアジャケットを展開する

「いきなり十機!？」

スバルが驚く

四人でも十機はまだ難しいのに刹那はそれを要求してきた

フェルトはそんなことを考えていなかった

ただ、刹那に近づきたくて刹那を守りたいという気持ちからであった

「フェルト、今から俺とガジェットを殲滅するぞ。フェルトは遠距離で俺のサポートだ」

「うん」

「じゃあ、訓練開始！」

そして訓練が開始した

刹那がGNソード改を展開して敵に接近する

エリオは刹那の動きを真剣に見ていた

フェルトはデュナメスのGNスナイパーライフルを手にして空中に飛翔する

その動きをティアナは見ていた

フェルトは間違いなくティアナと同じポジションになるだろう

刹那がGNソード改でガジェットの一機を切り裂く

フェルトは刹那をサポートしつつこちらに近づいてくるガジェットを距離を縮めないために狙撃する

精度はあまり高い方ではないが初めてにしてはいいほうであった

フェルトは次の目標に狙いを定めて狙い撃つ

「すごい。刹那さんは前からすごかったですけど、フェルトさんも未経験とは思えません」

キヤロが驚いていた

「やっぱり刹那さんは僕の目標です！いつか僕も……」

エリオは刹那を改めて目標と定めた

ティアナとスバルは二人の連携に見とれていた

ティアナはフェルトを見て複雑な表情を浮かべていた

（フェルトさんはあれ戦闘経験がない…やっぱり凡人は私だけか。でも関係ない！私はランスターの弾丸が誰にも負けていないことを証明するだけなんだから！）

だが、ティアナはこの焦った思いが誰かを危険に晒すことになることを予想もしていなかった

なのはとシャーリーも二人の連携は結構いいものだと感じていた  
フェルトは戦闘経験はないが、組織に入る際に多少は訓練をしているためすぐに慣れた

そしてフェルトはスナイパーライフルからケルディムのGNビームピストルに変換して接近してきた敵を撃ち落とす

だが、AMFで敵を落とせないときもあったが、それが足止めとなり刹那が後ろからGNソード改で破壊する

フェルトはそんな刹那に微笑んですぐに表情を変えて敵を撃ち落とすとしてそれであつという間に訓練は終了した

「速い…」

「うん。刹那君は相変わらずだけどフェルトちゃんも筋がいいよ」

「ティア、二人の連携どうだった？」

「主に刹那さんが敵を倒していつてそしてフェルトさんが刹那さんのサポートね。私たちと結構似ているわね。しかも私たちより連携がいい」

「うん。…負けられないね」

「そうね…」

そして刹那たちがこちらにやってくる

二人はジャケットを解除してなのはたちの前に立つ  
フェルトはやはり初めてだからか息が荒かった

刹那は普通にしていた

「二人ともお疲れ様。フェルトちゃん、感覚はどうだった？」

フェルトは深呼吸をして、落ち着いたところで話す

「アルテミスが補助をしてくれるので狙撃と射撃もなんとかでも得られるものは得たようだ

「それじゃあ、今日はここまで！シャワーを浴びて食堂に行こうか！」

「「「「はい！」「」「」」

そして今日の訓練が終了した

**episodes (後書き)**

話の展開が早いと思う

感想などよろしく願います！

4万PV突破とユニーク9千突破記念

another

episode

(前巻)

今回は刹那とフェルト

刹那とフェルトが異世界に来てから暫く経ち、現在クリスマス

今日機動六課は早めに業務を済ませて、クリスマスを楽しむようだ  
エリオとキャロはフェイトに注意を受けて二人で、スバルとティア  
ナのお馴染みコンビは出かけている

なのはとフェイトも二人で出かけているが、はやてはこんな日でも  
部隊長の業務に苦しんでいた

刹那とフェルトも初めての聖夜の夜を二人で過ごしていた

現在二人は外に歩いていて、刹那の服装はお馴染みでフェルトは  
読者の想像にお任せ

ちなみに二機のデバイスには退席させてもらっているよ（作者）

「どこに行こっか？」

フェルトが刹那に聞く

「特に無いな。フェルトはどうだ？」

「うーん…私も特にないかな（刹那といるだけでいいし）」

二人は特に行くところもなくグラナガンの街を歩いていた

二人は気がつかないだろうが、普通にしていれば二人は美男美女な  
のだ

隣合せて歩いていれば美男美女カップルなのだ

「（なんだ？周りの視線が異様に…）」

刹那は視線を感じ取り、警戒をする

この視線は二人を見て見とれている男女の視線だとも気づかず

「?どうかした刹那?汗がひどいよ?」

「っ……いやなんでもない」

「?」

周りの視線を感じていないフェルトは刹那が視線だけで冷や汗を流していることに気がつかない

そのあと二人は特に会話をせずただ歩いていく

それもそうだろう。二人は向こうでは毎日が戦いだっただ

安寧の日々は全てと言っつていいほどトレミーの中で過ごしていたのだが、あれはトレミーのなかであってこのような世界規模なイベントではなかった

「…平和だな」

「えっ?」

「元の世界だったら俺たちは戦いが日常だった。だが、今俺たちはこうして平和な日常を過ごしている」

「うん」

「だが、同時に俺たちは、俺はこの平和の中で生きていいのか?」

「…」



刹那の問いに答えられないフェルト

「戦いのない世界、それは俺たち『ソレスタルビーイング』が掲げた『紛争根絶』の先にある未来だ。だが、それを達成できていないのに俺たちはこうして戦いから離れて過ごしている」

刹那は喋るのをやめない

「本当にいいのか？このまま戦いから離れてしまったら俺は何のために生きていけばいいのか、俺から戦いをとってしまったら何が残るんだ？」

刹那は恐れていた

自分から戦いをとってしまったら、自分はどうかやって生きていけばいい？

なんのために生きていけばいい？

そんな思いが刹那の心を満たしていく

フェルトはそんな刹那の手を取る

「フェルト？」

フェルトは涙を流していた

「そんなこと言わないで。自分を戦うための道具みたいな言い方をしないで…お願い…！」

フェルトは涙を流しながら言葉を紡ぐ

悲しかった。今まで刹那の人生は戦いでいっぱいだった

人並みの幸せを一人の男に壊されてしまい、そこから少年兵となりガンダムマイスターとなる人生

一日一日が戦いで埋めつくされ、いつ死んでもおかしくない戦場

「私は…刹那にも幸せになって欲しい。戦いがあってもそれ以外の時は幸せな時間を送って欲しい。できれば戦いもやめて欲しいけど…刹那はそれを拒むんだろうけど、私や『マリナ』さんもきつとそれを望むと思うよ?」

「!……」

マリナの名を出されて言葉が出なくなってしまう刹那

「だから今だけでも…ねっ?」

「……」

沈黙の刹那

そして沈黙を破るのは、沈黙であった刹那だった

「いいのか?」

「うん。いいんだよ。誰にでも幸せは平等だから、刹那にも幸せはあるよ。きつと」

微笑みながら刹那に手を差しのべるフェルト

その手をじっと見る刹那

「(ニール、マリナ、俺は変わる。イノベーターとなっても俺自身の変革は続く。だから俺は今この平和を受け入れる。そして変わる。俺もフェルトも変わる!)」

そして刹那はフェルトの手を取る

「すまなかつたフェルト」

「うづん。私は刹那に幸せになつて欲しいだけだよ」

「…ありがとうフェルト」

笑顔で刹那はフェルトに礼を言う

「くく???!!!!//」

その笑顔はイノベイターとの最終決戦前にリ نداから貰つた花に写つていたあの時の表情だつた

誰にも心を開かなかつたあの頃とは違う。今はこうして仲間を思い、自分を変えようとする彼の笑顔を見ると自分でもわかるくらいに頬が熱くなつていくのが感じられる

「?フェルト、顔が赤いぞ。熱でもあるのか?」

そう言つて刹那はフェルトの額に手を当てる

「くく???!!!!//」

さらに赤くなるフェルト

先程の雰 囲気とは違うフェルト

今は完全に一人の女性となつていた

「ぎゅゅゅゅゅゅゅゅゅゅー!!」

「おい？フェルト！？」

そしてフェルトが元に戻るのに一時間ぐらいかかったそうなの。その後、二人は再び歩き出すが、フェルトの顔は終始赤くなっていた。

それもそのはず。先程手を取り、そのままずっと手を握りながら歩いていたのだから

しかも先程の沈黙とは違い、今度の沈黙はどこか優しく心地よい沈黙であった

二人はそのまま歩いていると、ある店の前にやって来た

「フェルト、少しここで待っていてくれ」

「？うん」

そう言っただけで刹那は店の中に入っていた

刹那が店に入ってから、数分が経つと、刹那が店の中から袋を持って出てきた

「すまないフェルト」

「ううん。何を買ってきたの？」

「ああ」

袋をフェルトの差し出す

「あの時の貰った花をなくしてしまったからな。それのお詫びだ」

フェルトは袋を手に取り、中身を見ている

「うわあ、綺麗…」

それはあの時刹那に渡した花とよく似ている黄色い一輪の花だったそう。刹那が寄った店は花屋だったのだ  
フェルトは花を大事そうに胸に抱える

「…ありがとう刹那」

静かに満面の笑みでフェルトは刹那に感謝する  
そうして刹那とフェルトの聖夜の夜は終わりを告げる

この後、二人は隊舎に戻るまで手を繋ぎっぱなしではやてたちに弄られたのはお約束  
フェルトは顔を真っ赤にしていたが、刹那は至って普通であった

なぜなんだ!?

どうしてもシリアスな雰囲気になってしまっ!

episode 10 (前書き)

何か頑張って書きました

でも、内容は薄いわグダグダでひどいよね

episode 10

お昼過ぎ

刹那とフェルトとなのはは訓練を早めに切り上げ、隊長室に向かっている

部屋に入ると、そこには既に三人を待っていたはやたとフェイトが座っていた

「遅いよなのは」

「にやはは…」

「すみません…」

「…それでどうした？」

なのはとフェルトは謝っているが、刹那は要件を尋ねる

「せやな。ほな、呼んだのは今度、ホテル・アグスタで行われるオークションに関してのことなんよ」

「オークション？」

「…ロストロギアか」

「さすが刹那君やな。鋭いわ」

フェルトはわからなかったが、刹那はそれを言い当てた

この機動六課は主にロストロギア『レリック』を取り扱う部隊だ



ロストロギア関係でなければこの部隊に仕事はこないだろう

「刹那君の言うとおり、そのオークションで出品物の中にロストロギアが出されるらしいんよ」

「そのロストロギアをレリックと間違えて、ガジェットが出てくるかもしれないからその護衛も兼ねてるんだよ」

「そして、その時にまた…」

「『スローネ』が出てくるかもしれない」

事実、スローネと互角以上の戦いができるのは刹那ぐらいだろう  
いや、あのスローネ以外だったら隊長陣でも互角に渡り合えるかもしれない

でも一番確実なのはスローネをよく知る刹那であるのは間違いない

「あと刹那君とフェルトちゃんには私たちと一緒にホテル・アグスタに入ってもらうことぐらいやな」

「私と刹那が、ですか？」

フェルトは意外そうな顔をしていた

「了解」

刹那はそれを引き受けた

過去にはティエリアのバックアップとしてアロウズの上層部が開くパーティーに潜入した

それと比べれば今回は簡単なものだ

そうしてその場で解散となり、刹那とフェルトとなのはは訓練所に戻った

フェルトとの訓練をしているときにシグナムに模擬戦を申し込まれたのは余談である

そして、場所は変わり現在六課のメンバーはヘリに乗り込んでホテル・アグスタに向かっていた

FWと副隊長二人、シャルとザフィーラは外の警備であった  
これなら普通のガジェットなら対処可能だろう

それにしても戦力が随分と集中しすぎだとは思うが…

「シャル先生、その後ろの箱はなんですか？」

シャルにティアナは気になったので聞いてみる  
すると、シャルは笑顔で言った

「隊長たちと刹那君とフェルトちゃんの仕事服よ！！」

ホテル・アグスタの前では、黒いスーツに身を包んだ刹那がいた

真面目な刹那はネクタイを緩めるといったことはしない  
もともとそうだったことをするような男ではないが

ホテルに入っていく女性は刹那をチラチラと見てくる  
刹那はそんなのを気にしている素振りにはまるで見せない

「似合ってますよ。マスター」

エクシアが刹那のスーツ姿を見て、感想を言う

「一度、潜入任務で着ていたからな」

無愛想に答える刹那

ここに着いてから刹那はここで待たされているが、特にイライラと  
いった感情はなかった

「お〜い！刹那くん！」

「…」

刹那はこちらに向かってくる四人の女性を見た  
いつもと違う四人を見て刹那は少し驚いた

四人はいつもの六課の制服ではなく、それぞれのドレスを着こなし  
て美しさが際立っていた

「ど、どうかな？刹那…」

フェルトはいつもカチューシャではなく長い髪をてっぺんで一つに

まとめ、薄黄色のドレスを着こなしていた  
顔も恥ずかしいからか赤かった  
ほかの三人は刹那を見た時点で顔は赤かったが、フェルトの発言で  
さらに赤くなっていた

「…ああ。似合ってる」

その一言で四人はさらに赤くなってしまった  
その時に、風邪か？と思ったのはお約束

「フフッ…ありがとう」

「でも、刹那君も似合ってるよ？」

「そうか？」

「うん。似合ってるよ」

「…ありがとう」

フェイトとフェルトにそう言われ、刹那は微笑みながらそう言った  
その時に四人は顔を赤くなっていたのが理解してもらいたい

そうして五人はホテル・アグスタに入っていた

その頃スターズ3、4は念話で会話をしていた

(でも、今日は八神部隊長の守護騎士団全員集合か)

(そうね……あなたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか副隊長たちのこと)

(うん……父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど……八神部隊長……中略……ま、八神部隊長の詳しい出自と能力の詳細は特秘事項だから私も詳しくは知らないけど……)

(レアスキル持ちはみんなそうよね……)

(ティア？何か気になるの？)

(別に……)

(そう……じゃあ、また後でね)

(ん……)

そしてスバルとの念話を終える

「(六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常……隊長格は全員オーバーS、副隊長でもニアSランク……あの年でもうBランクを持つてるエリオ、レアスキル持ちのキャラ、潜在能力の塊のスバル……そして次元漂流者の刹那さんとフェルトさん。刹那さんはリミッター付きとはいえあのシグナム副隊長に勝って、戦闘経験がないフェルトさんでも私と同じ、いやそれ以上だった。やっぱり私だけが凡人か……でもそんなのは関係ない！証明すればいいんだ！証明すれば済むことだ」

そんなことを考えながら警備にあたっていたティアナであった

「エクシア、中の様子はどうだ？」

「問題ないですよ。今のところは」

「アルテミスは？」

「こちらも大丈夫です」

刹那とフェルトは共に警備をしている  
ホテルの中は異常はなく、二人は待機をしていた

（刹那君、フェルトちゃん、そっちの方は大丈夫？）

（問題ない）

（はい）

なのはからの念話に答える刹那とフェルト

「！」

刹那は咄嗟にある方向を見た

「刹那？」

「フェルト」

「なに？」

「ここにいる」

「えっ？」

そう言つて刹那は走り出した  
まるで何かを見つけたかのように

「刹那……」

その背中をフェルトは黙つてみているしかなかった

刹那は必死に何かを探していた

『赤い』瞳ではなく『金色』の瞳で何かを探していた  
辺りを見渡すが、オークションに参加する人たちだけ

「（あれは……一体……）」

その場で止まり、刹那はもう一度辺りを見渡す  
だが、特に変わったものはない

「っ！」

すると、刹那は目を見開いてある方向を睨みつけるように見る  
大人数の客の中にいる特定の人物を見つけてるのは普通の人では容易  
ではない

そう『普通』だったら

刹那が見る先にいる一人の男

その人物は刹那を『金色』に輝いた瞳で不敵な笑みで見ている  
緑色の短い髪の男性。不敵な笑みを崩すことなく刹那を見据えるそ  
の瞳

かつて刹那を助け、組織に入れ、戦った男

そう、その男の名は

「『リボンス・アルマーク』！！！」



episode 10 (後書き)

感想待ってまーす

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6645y/>

---

リリカルなのは00StrikerS

2011年12月28日00時56分発行